

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1年計画の1年目)

1. 研究課題

20世紀作曲家における創作プロセスと語法創造

The Creative Process and Musical Language in 20th Century Composers

2. 研究代表者氏名

浅井 佑太

Asai Yuta

3. 研究期間

2021年4月-2022年3月(1年目)

4. 研究目的

20世紀以降の西洋音楽の歩みは、多くの作曲家たちが「独自の＝自分自身の」様式ないし語法の開拓に力を注いだことに特徴づけられる。様式はもはやかつてのような一般的文法ではなく、めいめいが自分自身で自分だけの音楽文法を創造し、それによって作曲するのである。十二音技法（新ウィーン楽派）、引用とパロディ（ストラヴィンスキー）、ハンガリー民謡の芸術音楽への導入（バルトーク）はいずれもこうした例である。メシアン有名な著作『わが音楽語法』は、すでにタイトルからして、文法の個別化というこの状況をはっきり示している。

本研究はリヒャルト・シュトラウス、マーラー、シェーンベルク、ウェーベルン、バルトークという20世紀を代表する五人の作曲家を例に、そのスケッチ・自筆譜資料に基づいて、彼らの「創作プロセス（どのようなプロセスで曲を作っていたか）」を「語法創造（いかに自分自身の語法を開拓し、それによって曲が作られたか）」という視点から比較検討し、20世紀固有の作曲状況に光を当てようとするものである。”

The development of Western music since the onset of the 20th century has been characterized by the fact that a number of composers have devoted themselves to creating individual styles and language, each having formulated his “own” musical grammar and composed music accordingly. In this study, we examine sketches of five 20th century composers, Richard Strauss, Mahler, Schoenberg, Webern, and Bartók, in order to discuss the relationship between the artist’s creative process and his unique musical language.

5. 本年度の研究実施状況

本年度は当初4月および8月の2回の研究会を対面で予定していたが、コロナのため海

外在住者2名が帰国できず、どちらもズームに切り替えた。発表内容は、19世紀の作曲行為の下部構造としての楽器技術の問題、マーラーを例とするオーケストレーションの無限変奏と「作品」の非所在、ストラヴィンスキーにおける「カット&ペースト」的な手法および時間芸術としての音楽の否定とその空間化、ウェーベルンの創作手法の科学実験的なものへの接近である。この2回の研究会の議論の焦点となったのは、とりわけ「20世紀における音楽詩学のラディカルなパラダイムチェンジ」である。そして新音楽を切り拓いた一連の作曲家（シェーンベルク、ストラヴィンスキー等）に対するマラルメの絶大な影響を考えると、マラルメの詩学について文学研究からの示唆を得る必要から、さらに3回目の研究会を追加した。

6. 本年度の研究実施内容

2021-04-04 20世紀音楽におけるスケッチとは何だったのか 発表者 浅井佑太 お茶の水女子大学基幹研究員人文科学系 コメンテーター 岡田暁生 コメンテーター 伊東信宏 大阪大学文学研究科

2021-08-15 20世紀作曲家における創作プロセスと語法創造（1） 作曲家の頭の中で音楽が響くということ ——シェーンベルクとウェーベルンを例に 発表者 浅井佑太 お茶の水女子大学基幹研究員人文科学系 マーラーの創作過程と語法創造——初期交響曲を例に—— 発表者 内藤眞帆 ボン大学 哲学科 コメンテーター 岡田暁生 コメンテーター 伊東信宏 大阪大学文学研究科

2021-08-16 20世紀作曲家における創作プロセスと語法創造（2） ストラヴィンスキーの創作美学 発表者 池原舞 桐朋学園大学音楽学科音楽学部音楽学科 バストランペット/テナーホルンの諸問題：《ニーベルングの指環》前後の作曲家と楽器製造の関係をめぐって 発表者 秋山良都 ライプツィヒ大学附属楽器博物館 コメンテーター 岡田暁生 コメンテーター 伊東信宏 大阪大学文学研究科

2022-02-16 マラルメあるいは象徴について 発表者 佐藤淳二

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

岡田暁生、森本淳生

学外

浅井佑太(お茶の水女子大学基幹研究員人文科学系)、秋山良都(ライプツィヒ大学附属楽器博物館)、池原舞(桐朋学園大学音楽学科音楽学部音楽学科)、伊東信宏(大阪大学文学研究科)、内藤眞帆(ボン大学 哲学科)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	1	3			1		9			3	
/											
国立大学	2	2			1		6			3	
/											
公立大学											
/											
私立大学	1	1			1		3			3	
/		(1)			(1)		(3)			(3)	
大学共同利用機関法人											
/											
独立行政法人等公的研究機関											
/											
民間機関											
/											
外国機関	1	1			1		3			3	
/		(1)			(1)		(3)			(3)	
その他 ※											
/											
計	5	7	0	0	4	0	21	0	0	12	0
/		(2)	(0)	(0)	(2)	(0)	(6)	(0)	(0)	(6)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)				
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	3			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
『お茶の水音楽論集 24号』	1	R3. 3	20世紀「新音楽」における作曲コンセプトと創作プロセスの関係 ——バルトーク《マイクロコスモス》第141番〈イメージと反映〉とウェーベルン《弦楽四重奏》作品28の比較を通して	浅井佑太
『音楽学』	1	R4. 1	「批判校訂全集からみるバルトーク研究の現在：『マイクロコスモス』合評を中心に」	伊東信宏

本年度 共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
Anton Webern: Komponieren als Problemstellung. Quellenstudien zu seinem Schaffen 1914-1926	Yuta Asai	r3. 8	Franz Steiner

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

なし

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

本年度の研究の総括を 2022 年度の人文研アカデミーにて浅井と副班長の岡田が行う。
また成果は人文学報の論文として公表する予定である。